



怪談&幻想文学 ベストブック 2020

東雅夫（アンソロジスト／文芸評論家）＋植松靖夫（翻訳家／東北学院大学教授）＋黒木あるじ（作家）＋土方正志（荒蝦夷）が、2020年の怪談幻想文学のベストブックをご紹介します！



植松靖夫◎翻訳家／東北学院大学教授

1953年、北海道生まれ。上智大学大学院博士後期課程修了。訳書にコリン・ウィルソン『人狩り 連続殺人犯を追いつめる！』（悠書館）、アルジャーノン・ブラックウッド『心霊博士ジョン・サイレンスの事件簿』（創元推理文庫）、アレクスター・クロウリー『麻薬常用者の日記』（国書刊行会）など。

- ①『言葉の守り人』ホルヘ・ミゲル・ココム・ペッチ（吉田栄人訳）／国書刊行会／2640円
- ②『アラバスターの手 マンビー古書怪談集』A・N・L・マンビー（羽田詩津子訳）／国書刊行会／2970円
- ③『ダフォエルの花 ケネス・モリス幻想小説集』ケネス・モリス（館野浩美・中野善夫訳）／国書刊行会／4180円
- ④『影を呑んだ少女』フランシス・ハーディング（児玉敦子訳）／東京創元社／3630円
- ⑤『幻想と怪奇3 平井呈一と西洋怪談の愉しみ』新紀元社／2200円

①「新しいマヤの文学」シリーズの第2弾。仲間褒めと誤解されるのが嫌で、毎年、国書刊行会の本は極力避けているのだが（差別？）、今年は3冊も推薦せざるを得なくなった。もちろん広く読者に知ってもらいたいからだ。本書の「言葉の守り人」というのは、口伝で民族の神話・伝承を語り伝えていく者で、マヤの賢人の爺さんに抜擢された主人公である一人の少年がその役割を担って、神や精霊の住まいである森の中に何度も入り込んで修行を重ね成長していく。マヤ語の現代文学にこんな重層的なファンタジーがあったとは……ほかの出版社も売れ筋の二番煎じばかりしていないで、新しい鉱脈の発見と発掘に努めてもらいたい。②作者（1913-1974）はケンブリッジ大学図書館の司書を経て、ケンブリッジ・オックスフォード両大学で書誌学の准教授を務めたのち、イギリス書誌学会の会長に選出された。その経歴を活かして怪しげな古書店主をめぐる怪異譚、いわくつきの聖書台やジョン・ディーの魔術書など古書をめぐる因縁話を書き残した。本書にはM.R. ジェイムズの後継者とも目された正統派のイギリス怪奇小説14編を収める。③南ウェールズ生まれの作家でアメリカ在住中に神智学協会の会員となり、神話や伝説、ウェールズの伝承を独自の世界観で仕立て直し、名匠の技を思わせる彫琢された文章により、神秘主義的傾向の強い幻想譚を生み出した。本書所収の29編には、壮大な宇宙から流れ出て来るかの如き詩的な文章が醸し出すこの作家ならではの異次元の味わいがある。④これで連続3年ハーディングの小説を推すことになる。初作以来読者を裏切らないレベルを維持している。舞台は17世紀のイングランド、ピューリタン革命の時代である。主人公の少女はこの動乱の時代を父方の一族に受け継がれる特殊能力、すなわち霊を憑依させる異能を発揮して生き抜く波瀾万丈の物語だ。ファンタジーが基調になっているが、緻密な時代考証に裏打ちされた歴史小説としても秀逸。⑤2019年10月に事実上の創刊号『幻想と怪奇 傑作選』が刊行され、今年2月の『幻想と怪奇1 ヴィクトリアン・ワンダーランド 英国奇想博覧会』以降は3か月おきに「特集」のテーマを変えながら精力的に発刊が続いている。平井呈一の英語力は正直なところ「怪しい」のだが、翻訳臭のない怪奇幻想小説にふさわしい文体を縦横無尽に駆使して一つの世界を造り上げた功績は忘れてはならないし、彼が読書人に広く認識させた「恐怖の愉しみ」の価値は正当に評価すべきだろう。

東雅夫◎アンソロジスト／文芸評論家／おばけずきネットワーク代表

1958年、神奈川県生まれ。早稲田大学卒。著書に『遠野物語と怪談の時代』（角川選書／日本推理作家協会賞）、『クトゥルー神話大事典』（新紀元社）、編纂書に、「文豪ノ怪談ジュニア・セレクション」（汐文社）、「文豪怪異小品集」（平凡社ライブラリー）、『文豪たちの怪談ライブ』（ちくま文庫）など。

- ①『日本幽霊画紀行 死者凶像の物語と民俗』堤邦彦／三弥井書店／3080円
- ②『片山廣子幻想翻訳集 ケルティック・ファンタジー』片山廣子（未谷おと編）／幻戯書房／5280円
- ③『城の少年』菊地秀行（Naffy 画）／マイクロマガジン社／1760円
- ④『赤江瀑の世界』赤江瀑ほか／河出書房新社／2860円
- ⑤『SFショートストーリー傑作セレクション 怪獣篇』日下三蔵編（中川学絵）／汐文社／1980円
- ⑥『妖しい戦国 乱世の怪談・奇談』東郷隆／出版芸術社／1760円
- ⑦『国民国家と不気味なもの』堀井一摩／新曜社／4180円
- ⑧『絵本の春』泉鏡花（金井田英津子画）／朝日出版社／2310円
- ⑨『泉鏡花俳句集』秋山稔／紅書房／1980円
- ⑩『高丘親王航海記』近藤ようこ（澁澤龍彦原作）／KADOKAWA／880円

まさか、こんな事態になろうとは……去年の今ごろは想像もしなかった状況が、今なお続いている。ここまで来ると出版界も演劇界も、抜本的な方法論の見直しを図らざるをえないだろう。演劇はともかく出版については、長らく云われてきた流通や販売の形式が、一挙に崩され変容する可能性が高い。雑誌も青息吐息。取材も打ち合わせもままならない。たまたま平成の終わりとともに、ヤクザな雑誌づくりの世界から足を洗った小生、先見の明が！ と金沢のサブ事務所に避難して余裕綽々だったはずが、気がつけば出版各社の予定が狂いまくりで新刊を出せず、青ざめた。完全フリーになることは原稿料や編纂印税以外の収入がゼロとなることを意味するわけで、これは生存の危機である。それでも何とか単行本十冊を出して一息ついたが先行きは不透明このうえない……仙台の古書店主氏、意外に先見の明があるよーな（笑）。

さて、そんななか今年も多くの注目が登場した。文芸書については『小説推理』や『ダ・ヴィンチ』の年間総括で触れたので、ここでは触れそびれていた良書を中心に紹介したい。とりわけ①は、当代きっての幽霊国文学者が十全に本領を發揮した待望の書。日本各地の幽霊掛軸について、これほどまとまった探求書は空前絶後だろう。②も日本におけるケルト幻想の軌跡をコツコツ探求してきた編者による大労作。最近作家限定で資料蒐集に励む市井の碩学が増加傾向にあって悦ばしい限り。③は伝奇アクションの帝王が放つ、渾身の絵本（笑）。一年ぐらい前から同書の話が訊かされていて愉しみにしていたのだが、期待に違わぬ本領發揮の力作だった。④も戦後幻想文学の重要な担い手だった赤江瀑復権へ向けての待ちに待った企画。いま東京創元社でスタートした〈赤江瀑アラバスク〉編纂に際して、頻りに参照しているところ。よく出来てます。装画の中川学の怪獣魂が咆吼する⑤、東郷隆の剣客魂（？）が炸裂する⑥、⑦・⑧・⑨は、今年も衰えをみせぬ泉鏡花の新たな魅力を、評論・画本・句集の形でそれぞれに追求した貴重な成果だった。最後はコミックを。ついに単行本化が始まった⑩は、澁澤龍彦最晩年の名品を、近藤ようこが鮮やかに視覚化して圧巻だった。

◎東雅夫の仕事 2020◎

- 天上天下 赤江瀑アラバスク 1／創元推理文庫／1540円
文豪怪奇コレクション 獵奇と妖美の江戸川乱歩／双葉文庫／902円
文豪怪奇コレクション 幻想と怪奇の夏目漱石／双葉文庫／836円
ゴシック文学神髓／ちくま文庫／1430円
東西怪奇実話 日本怪奇実話集 亡者会／創元推理文庫／1210円
東西怪奇実話 世界怪奇実話集 屍衣の花嫁／創元推理文庫／1210円
ゴシック文学入門／ちくま文庫／1045円
幻想と怪奇の英文学 4 変幻自在編／春風社／3300円
幻想小説とは何か 三島由紀夫怪異小品集／平凡社ライブラリー／1870円
幻想と怪奇 3 平井呈一と西洋怪談の愉しみ／新紀元社／2420円
贅宴 山下昇平作品集／二見書房／3080円
泉鏡花〈怪談会〉全集／春陽堂書店／4950円

黒木あるじ◎作家

1976年、青森県生まれ。東北芸術工科大学卒。2009年に第7回ピーケーワン怪談大賞で佳作、第1回『幽』怪談実話コンテストで「ブンまわし賞」を受賞。著作に『掃除屋（クリーナー）プロレス始末伝』（集英社文庫）、『無惨百物語』シリーズ（角川ホラー文庫）など。2021年は東北のアレとアレの小説を刊行予定。

- ①『日本怪奇実話集 亡者会』東雅夫編／創元推理文庫／1210円
- ②『文豪怪奇コレクション 幻想と怪奇の夏目漱石』東雅夫編／双葉文庫／836円
- ③『ゴシック文学入門』東雅夫編／ちくま文庫／1045円
- ④『片山廣子幻想翻訳集 ケルティック・ファンタジー』片山廣子（未谷おと編）／幻戯書房／5280円
- ⑤『断頭台／疫病』山村正夫（日下三蔵編）／竹書房文庫／1540円
- ⑥『アラバスターの手 マンビー古書怪談集』A・N・L・マンビー（羽田詩津子訳）／国書刊行会／2970円
- ⑦『バグダードのフランケンシュタイン』アフマド・サアダーウィー（柳谷あゆみ訳）／集英社／2640円
- ⑧『日本幽霊画紀行 死者凶像の物語と民俗』堤邦彦／三弥井書店／3080円
- ⑨『来訪神事典』平辰彦／新紀元社／3300円
- ⑩『山下昇平作品集 贅宴 -ShiEn-』山下昇平・京極夏彦・東雅夫ほか／二見書房／3080円

災禍に翻弄された一年。現実があまりにも残酷であるがゆえ怪奇幻想小説を求める読者が多かったような……とは希望的観測が過ぎるだろうか。そんな人々の渴きを満たすがごとく活躍したのが東雅夫氏。例年以上の刊行点数からどれを選ぼうか嬉しい悲鳴をあげつつ三冊をチョイス。民話から新聞の公募録まで幅広く網羅した①は、橘外男「蒲団」（実話ベース！）が白眉。同時発売の『世界怪奇実話集 屍衣の花嫁』もぜひ。〈文豪怪奇コレクション〉第一弾の②は、「夢十夜」「倫敦塔」などの傑作もさることながら俳句や新体詩が素晴らしい。③は、ともすればアバウトに用いられがちな語句〈ゴシック〉を再確認するための一冊。「眼のゴシック」から「嗜屍と永生」までの流れに酔いしれる。『ゴシック文学神髓』と併せて読んでほしい。④は、松村みね子の筆名でアイルランド文芸復興に尽力した翻訳家の作品集。注目はベインによるダークファンタジーの傑作「闇の精」。片山特集号と言っても過言ではない『ナイトランド・クォーター』Vol. 23（アトリエサード）も一緒に。⑤は最近どうかしている（褒めてます）竹書房から刊行された山村正夫の短編集。表題作「断頭台」は最後の一行に叫んでしまった。自作解説でもある対談が貴重。⑥は英国作家A・N・L・マンビーの全作品（！）を収録した古書にまつわる怪談集。「甦ったヘロデ王」は古書マニアならゾットとする物語。帯の惹句もすさまじい。⑦は、かの著名な怪物をモチーフにした珍しいイラク小説。幻想と社会は地続きであることを実感する作品。日本各地の幽霊画をめぐる⑧には青森県弘前市や山形県上山市の収蔵品も載っており、東北民は必読の書。ユネスコ無形文化遺産にも登録された来訪神を解説する⑨、どこかユーモラスな神々は眺めているだけで嬉しい。山形県遊佐町のアマハゲも地区ごとに紹介されている。⑩は「てのひら怪談」シリーズの表紙で知られる造形作家の作品集。想像力を掻きたてる怪しくも美しい作品群。それらにインスピレーションを受けて東西の作家が提供した掌編も秀逸。ちなみに、とりわけ印象的な生首少女作品「慕受信塔」は、なぜか我が家にあったりする。

◎黒木あるじの仕事 2020◎

- 怪談四十九夜 断末魔／竹書房怪談文庫／715円
ダーク・ロマンス 異形コレクション／光文社文庫／1100円
葬儀屋 プロレス刺客伝／集英社文庫／748円
黒木魔奇録 狐憑き／竹書房怪談文庫／715円
怪談四十九夜 鬼気／竹書房怪談文庫／715円
怪談実話傑作選 磔／竹書房怪談文庫／715円

土方正志◎荒蝦夷

1962年、北海道生まれ。東北学院大学卒。〈古本あらえみし〉ですが、今年はお仲間の古本屋さんたちと仙台駅前イービーズ3階に「仙台古本倶楽部」オープン、さらに古本市では青森まで遠征も。根多加良、大活躍！『佐左木俊郎探偵小説選』第2巻と『杉村顕道作品集』は2021年に持ち越し、お楽しみに！

- ①『ウィトゲンシュタインの愛人』デイヴィッド・マークソン（木原義彦訳）／国書刊行会／2640円
- ②『ダフォディルの花 ケネス・モリス幻想小説集』／ケネス・モリス（館野浩美・中野善夫訳）／国書刊行会／4180円
- ③『アラバスターの手 マンビー古書怪談集』A・N・L・マンビー（羽田詩津子役）／国書刊行会／2970円
- ④『バクダードのフランケンシュタイン』アフマド・サアダーウィー（柳谷あゆみ訳）／集英社／2640円
- ⑤『凶書室の怪 四編の奇妙な物語』マイケル・ドズワース・クック（山田順子訳）／創元推理文庫／1012円
- ⑥『ブツアーティ短編集Ⅲ 怪物』ディーノ・ブツアーティ（長野徹訳）／東宣出版／2304円
- ⑦『草地は緑に輝いて』アンナ・カヴァン（安野玲訳）／文遊社／2750円
- ⑧『片山廣子幻想翻訳集 ケルティック・ファンタジー』片山廣子（未谷おと編）／幻戯書房／5280円
- ⑨『泉鏡花〈怪談会〉全集』泉鏡花（東雅夫編）／春陽堂書店／4950円
- ⑩『西洋怪奇実話集 屍衣の花嫁』平井呈一編訳／創元推理文庫／1210円

黒木あるじと「今年はかなり被りそうだね」と話していた。豊作だったように思うのだが、それだけにある本この本、誰かがセレクトするであろうとは予測できる。そして、このテのベストテン企画、さいごにまとめあげる担当者は不利なのだ。到着する各セレクトに、あ、アレが入ってる、コレも選ばれた、人気投票なら被ってもいいのだが、メンバーのセレクトがあからさまにダブるとおもしろくない、ご覧のみなさんにもいろいろ多彩に本をご紹介したい……となると、担当者はなんのことはない調整役を務める羽目になりがちなのだが、それはそれでなんだか悔しかったりもして、結局は「えいやっ！」で決めた。それにしても今年是被りまくりである。②は植松選、③は植松・黒木選、④は黒木選、⑤は東・黒木選、さらに今年あちらこちらでご紹介してきた『言葉の守り人』まで植松さんがチョイスしている。そのあたりはみなさんにおまかせして、人類が滅亡した世界、たったひとりの生き残りの女性の日記①がまずはなににせよ良かった。カラストロフの詳細は語られぬまま、生存者のひとり語りが続く。リアルでクール、それでいて夢想的、ロード・ノベルの趣もある。M・P・シールの『紫の雲』（アトリエサード）をちょっと思い出したりもして、コロナの年ならでは読むべき作か。同じ作者の『これは小説ではない』（水声社）もおススメ。⑤は近年の作なのになつかしき香気、作者のジャンルへの溢れる「愛」を堪能した。イタリア幻想作家の短編集最終巻となった⑥は、いわゆる「奇妙な味」を楽しみたい読者には見逃せない。⑦はこのところの再評価がすっかり定着した感のある作者の短編集、いつもながらの静かな狂気が読ませる。未体験の読者は、カヴァン・ワールドを、ぜひ。⑨はこれまたこのところちょっとしたブームの鏡花だが、本書は往時の頁そのままの復刻が格別、タイムマシンのごとく読者を異界へ連れ去る。同じく復刻の谷崎潤一郎・水島爾保布『人魚の嘆き・魔術師』もよければ、刊行中の横溝正史『完本 人形佐七捕物帳』も楽しみ、がんばれ春陽堂！ 平井呈一が存在がクローズアップの昨今、練達の西洋怪談実話を堪能させてくれた⑩、平井とその周辺に関しては善渡爾宗衛・杉山淳編『荷風を盗んだ男 「猪場殺」という波紋』（幻戯書房）も興味深かった。

◎土方正志の仕事 2020◎

瓦礫から本を生む／河出文庫／1078円

◎荒蝦夷の仕事 2020◎

震災学 vol. 14／東北学院大学編／2200円

真田啓介ミステリ論集 古典探偵小説の愉しみⅠ フェアプレイの文学／4400円

真田啓介ミステリ論集 古典探偵小説の愉しみⅡ 悪人たちの肖像／4400円